

1. はじめに

昭和 30 年代の高度経済成長を契機とする経済・交通の急激な進展、社会構造・生活様式の変化に伴って、日本各地でそれまで先人から脈々と受け継がれてきた生活慣行や生活用具をはじめとする民俗資料が次々と失われていった。このことは富士市においても例外ではなく、市内に伝わってきたさまざまな民俗資料を、実際に目にするには非常に難しい状況となっている。しかしながら、富士市東部、^{あしたかやま}愛鷹山西麓に位置する^{うないがふち}鵜無ヶ淵集落では、神楽、ドンドンヤキをはじめとして、古くから伝わる民俗が現在でも受け継がれている。鵜無ヶ淵のこうした事例は、これまでさまざまな形で紹介されてきたが、それらは、神楽なら神楽、どンドン焼ならどンドン焼きといった形での個別の事例の詳しい分析が中心であり、こうした事例が鵜無ヶ淵に住む人々の一年の暮らしの中でどういった位置をしめているのかについてはそれほど言及されてこなかった。

そこで、本稿では、現在の鵜無ヶ淵の一年を追い、そのサイクルの中で、鵜無ヶ淵に古くから伝わる民俗がどのように位置付けされているのかについての記述を行っていきたい。

2. 鵜無ヶ淵の概要

鵜無ヶ淵は富士市の北東部に位置し、愛鷹山中を源とする赤淵川に沿って集落が形成されている。富士市の大半は温暖湿潤な海洋性気候であるが、鵜無ヶ淵の標高は 200 ~ 250 メートル程度で、市街地の平均気温と比較すると約 3 ほど低くなっている。また、鵜無ヶ淵が位置する富士、愛鷹山麓は火山灰土の土地であり、降雨は地中に浸透してしまうため、上水道が普及する昭和 30 年頃までは、水に乏しい地域であった。

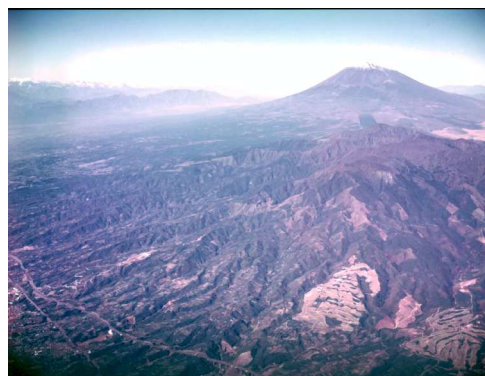


写真 1：富士山と愛鷹山

『吉永の郷土史』によると、鵜無ヶ淵の由来は源頼朝が巻狩りの際、この地の淵に鵜がいると言うことで立ち寄ったが、鵜がないので「鵜がない淵か」とつぶやいたことから鵜無ヶ淵と呼ばれるようになったという。当時の領主は定かではないが、中世には今川氏の所属となり、次いで武田氏および徳川氏に移り、天保年間（1830 ~ 1843）に

は旗本戸田鍋太郎の領地となり、明治元年には徳川家建、明治4年に静岡県^の管轄となつたと、『吉永村史稿』に記載されている。

昭和50年代には、集落の北西に団地（親子台、陽光台）が造成され、従来の集落が鵜無ヶ淵1丁目、団地が鵜無ヶ淵2丁目となったが、本稿では従来の集落の事例を中心に記述するため、以下で述べる鵜無ヶ淵とは、鵜無ヶ淵一丁目のことを示すこととする。

鵜無ヶ淵や周辺の間門、石井、桑崎、勢子辻といった地域は古くから林業が積極的に行われ、ヒノキ、スギ、マツなどの材木や薪炭用としてカシ、クヌギ、ナラ、シイ、クリ等の雑木を産出していたという。『吉永村史稿』によれば、明治29年には植樹が始まり、個人有地のほか、村有林、組合共有林、学校林といった形で林業経営が行われたという。また、林業とあわせて、畑での米や麦、雑穀や^{そさい}蔬菜の栽培が行われていた。そのほか、製茶や養蚕、葉煙草の栽培、明治40年頃からは、梨や柑橘類の栽培も行われるようになったという。

その後、社会的需要に応じて林業を中心として、製茶、柑橘類の栽培が鵜無ヶ淵の産業の中心となっていった。現在では、こうした産業に従事する人のほか、市街地に出て会社に勤務する住民も多い。

鵜無ヶ淵の人口（平成17年4月1日）は531人（男253人、女278人）、世帯数は158戸となっている。全158戸は12組に分割されており、各種行事の準備や運営は組が持ち回りで執り行っている。

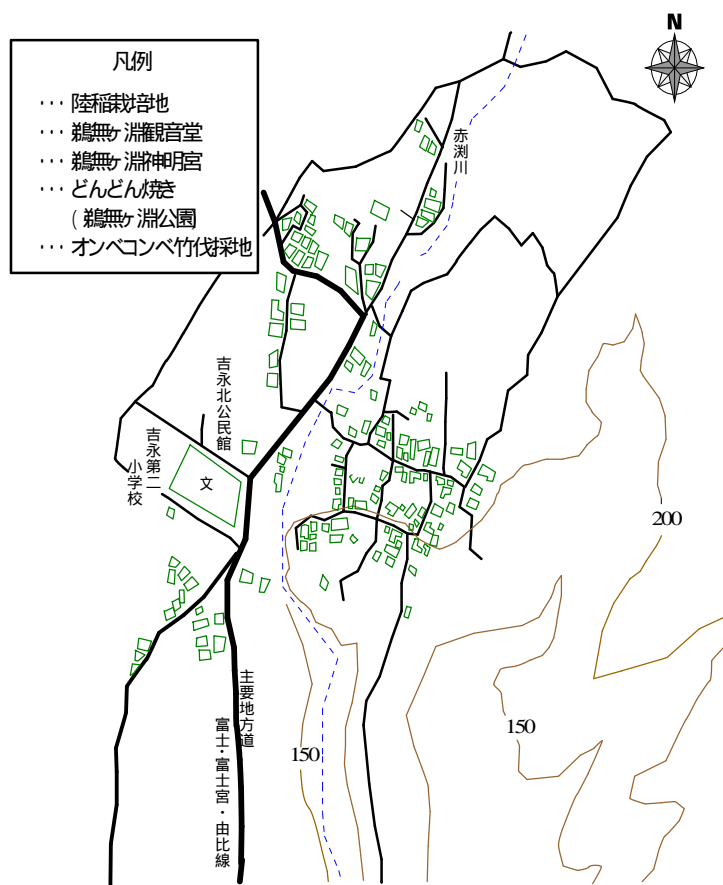


図1: 鵜無ヶ淵集落地図

3 . 春の鶺無ヶ淵 - 陸稲の栽培 -

4月に入ると、翌年の正月の注連縄^{しめなわ}作りに用いる藁^{わら}を手に入れるために、鶺無ヶ淵では陸稲の栽培が始まる。平地の少ない鶺無ヶ淵では古くから水田による稲作はほとんど行われず、注連縄を作るためには、畑で育てた陸稲の藁を用いるか、近隣の水田稲作を行っている地域から手に入れるしかなかった。

現在では、市販されている注連縄を購入して正月を迎える家庭が多くなったため、自家製の注連縄を正月に飾る家庭は減少してしまった。しかしながら、ここ数年、公民館での生涯学習や、小学校での総合学習の一環として注連縄作り教室などが開催されており、このような講座や教室で使用する藁を確保するために、限られた場所であるが、陸稲の栽培が行われている。

本来、陸稲は水田で用いられる稲とは異なる品種が栽培されるが、現在の鶺無ヶ淵の陸稲栽培では、米を収穫する事が目的ではなく、注連縄作りに適したやわらかい藁を手に入れることが目的とされているため、水田稲作で用いられるもち米の種類が選ばれている。

牛糞、鶏糞、化成肥料が入った畑に 40cm 程度の畝^{うね}を作り、種はそこにばら蒔きされた後、上から土をかけられる。発芽後、頃合を見て草取り、土寄せを行うとともに、硫酸^{りゅうあん}（硫酸アンモニウム）を三回程度散布し、稲の生育を促すことになる。



写真 2 : 陸稲の種まき

そして、順調に成長した陸稲は、穂^{ほく}が膨らんでくる前に刈り取りが行われ、冬まで保管されることになるが、この陸稲の刈り取りや保管については、後ほど詳しく取り上げる。

4 . 夏の鶺無ヶ淵 オカンノンサン -

梅雨もそろそろ明けようかという 7 月中旬、鶺無ヶ淵では、観音様の祭礼ⁱⁱ（オカンノンサン）ⁱⁱⁱが行われる。かつては、全国の霊場観音の縁日が月の 18 日であることから、7 月 18 日に祭礼が行われていたが、市街地に出て会社勤めをしている方も増えてきたことから、7 月の第三週の日曜日に祭礼が行われるようになった。

夏のこの時期に鶺無ヶ淵で観音様の祭礼が行われることの背景には、本格的な夏を前にして、農作物の順調な成長を願うこの地域の人々の切なる願いがあるのではないだろうか。

当日は、当番組の人々が観音堂をハナと呼ばれる造花や、米の粉で作った団子で飾り付ける。午後 3 時頃、富士市三ツ沢の長遠寺の上人によって読経がおこなわれ、夕方からは、屋台やカラオケが設置され、観音堂の周りにはあちらこちらから人々が集まってくる。

こうした観音様の祭礼は富士市内でも広くみることができるが、鵜無ヶ淵のオカンノンサンの特徴は、古くからこの地域に受け継がれてきた神楽が奉納されるということである。

『静岡県の民俗芸能 - 静岡県民俗芸能緊急調査報告書』によれば、鵜無ヶ淵に神楽を伝えた人物として「文平」という名前が登場するという。「文平さんは大工で、その仕事の関係で鵜無ヶ淵に移り住んで神楽を伝えた」といった伝承や「文平さんがどこかの旅先で神楽を覚えてきた」といった伝承が鵜無ヶ淵には伝えられている。

オカンノンサンの準備や運営は、その年の当番組が執り行うが、神楽は鵜無ヶ淵神楽保存会の人々によって演じられている。昭和 40 年頃までは、神楽を演じるのは、鵜無ヶ淵の青年団に所属している長男に限られていたが、高度経済成長とともに、市街地に働きに出る人や、他地域に勤めに出る人が増加したことから人員不足に陥った。青年団に属していない人や長男でなくとも神楽を演じることができるよう、神楽の保存会が結成され、現在へと受け継がれてきたのである。現在、保存会には約 30 名のメンバーが属しているが、実際に神楽を演じているのは、その中の 15 名ほどであるという。

保存会のメンバーは、獅子、笛、太鼓の三つのパートに分かれて、神楽を演じる。保存会の方からの聞き取りによれば、それぞれのパートを演じるのに特別な条件があるわけではなく、希望したパートを演じることができるという。しかし、獅子を演じるには背の低い人のほうが見栄えがするということから、背の低い人はできるだけ獅子のパートに振り分けるようにすることもあるという。また、

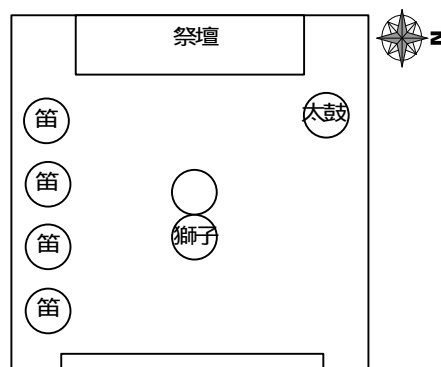


図 2：神楽人員配置図

青年団に所属する長男のみで神楽を行っていたときは、各パートの練習は、若い頃に神楽を演じた年長者

を師匠として、師匠の家で練習を行っていたが、現在では、各パートの練習はカンノンサンが行われる一ヶ月前くらいから鵜無ヶ淵公会堂に集まって行われている。

この鵜無ヶ淵の神楽には「下がり葉の舞」、「幣の舞」、「剣の舞」、「狂の舞」という 4 つの舞があり、オカンノンサンでは、午後 7 時半頃から観音堂の中でこの四つの舞すべ

てが演じられる。

以下では、それぞれの舞について詳しくみていきたい。

「下がり葉の舞」

- ・ 目的 神の御心を案じ奉る舞
- ・ 演者 二人立て
- ・ 笛 4人 太鼓 1人（すべての舞に共通）
- ・ 採り物^v なし
- ・ 所作

胴幕^{どうまく}の裾を絞って回す。

床に近づけた獅子頭をゆっくり上下左右に動かす。

胴幕の裾を絞って回す。

左右を向く。

胴幕の裾を絞って回す。

堂内を一周して終了。



写真 3：下がり葉の舞

「幣の舞」

- ・ 目的 国家安泰、五穀豊穰を祈る舞
- ・ 演者 一人立て
- ・ 採り物 幣 鈴
- ・ 所作

胴幕の裾を絞って袴の中に入れる。

A B A と動きながら、左手を腰に添え、幣と鈴を右手に持って、左右に振る。

A B A と動きながら、幣を床と平行に両手に持ち、左右に振る。

A ではやしが流れる間、右手に鈴、左手に幣を持ち、腕を大きく広げる。

幣を回転させ、の形に戻る。

幣を回転させ、幣と鈴を体の前面で構える。



写真 4：幣の舞

と同じ動作。

左足を前方へ出すと同時に幣を回転させる。回転させた後、幣を肩に載せる。

右足を出すと同時に鈴を鳴らす。

、の動作を繰り返してBへ移動。

Bで南を向いての動作。

、の動作を繰り返してCへ移動。

Cで北を向いての動作。

Cで北を向いての動作。

と同じ動作。

、の動作を繰り返してDへ移動。

Dで南を向いて幣を脇にはさみ鈴を鳴らす。

Dで南を向いての動作。

、の動作を繰り返してAへ移動。

Aで祭壇を向いての動作。

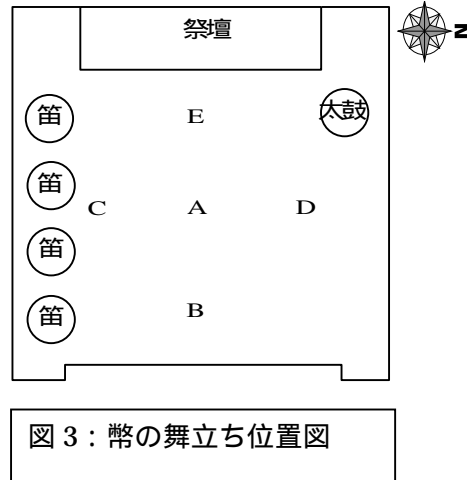
21、の動作を繰り返してEへ移動。

22 Eで正面を向いての動作。

23 Eで幣と鈴を近づけたり、遠ざけたりしながら左回りに1回転。

24 鈴を鳴らす。

25 鈴を床において、幣を両手に持って一礼して終了。



「剣の舞」

- ・ 目的 悪病を退散させ、家内安全を祈る舞
- ・ 演者 一人立て
- ・ 採り者 剣
- ・ 所作

鞘に入っている剣を両手に持ち、右手で剣を抜く。剣と鞘を交差させ、一礼。

右手に持った剣と左手に持った鞘を交互に2回転ずつさせた後、剣と鞘を同時に1回転させる。

右手に持った剣を高く掲げ、堂内を左回



写真5：剣の舞

りで一周。

正面に戻ると剣と鞘を交差させ、の動作を行いながら A から B に移動。

剣を高く掲げ、祭壇を向いて停止。太鼓より、「一に大山、石尊様よ」の声がかかる。

の動作を行いながら A に移動。

剣を高く掲げ、正面を向いて停止。太鼓より、「二に根方の愛鷹様よ」の声がかかる。

剣を高く掲げ堂内を左回りで A から C まで移動。

の動作を行いながら D に移動。

剣を高く掲げ、南を向いて停止。太鼓より、「三に讃岐の金毘羅様よ」の声がかかる。

剣と鞘を脇にしまって、堂内を左回りで一周。

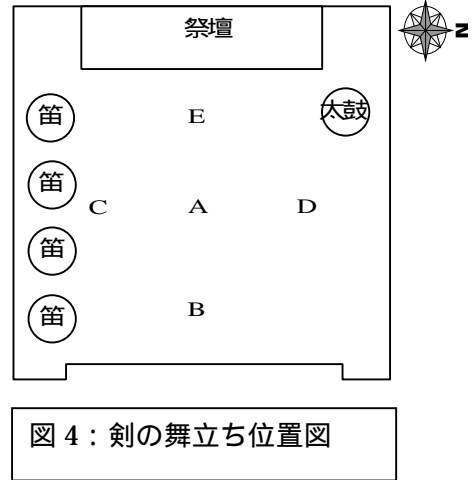
の動作を行いながら C に移動。

剣を高く掲げ、北を向いて停止。太鼓より、「四がところの氏神様よ」の声がかかる。

C から B に移動し、左を向いて一礼して剣を 2 回振り下ろす。右を向いて一礼して剣を 2 回振り下ろす。

B から A に移動し、と同じ動作を行う。

剣を鞘にしまって終了。



「狂いの舞」

- ・ 目的 下がり葉、幣、剣の三つの舞を総合した舞
- ・ 演者 二人立て
- ・ 採り物 なし
- ・ 所作

A で胴幕の裾を絞って回す。

大きく左右をゆすって B に移動。

胴幕の裾を絞って回しながら A に戻



写真 6 : 狂いの舞

る。

獅子頭を高く掲げる。

獅子頭を床近くまで一気に下げ、Bへ移動。

獅子頭を大きく回しながらAに移動。太鼓から、「ご信心の御神楽すっかり払ってめでたいな」の聲がかかる。

左右に大きく体を振りながらBに移動。

獅子頭を高く上げる。

Bではやしにあわせて獅子頭の口を動かしながら左右に激しく動く。

BからAに移動し、堂内を左回りで一周。獅子頭を高く掲げながらさらに一周。

左右に大きく動きながらBに移動して終了。

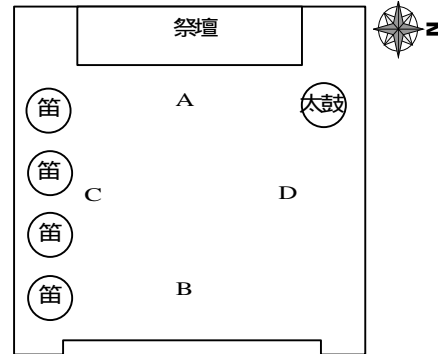


図5：狂いの舞立ち位置図

こうして、約30分で神楽が終了すると、観音堂の周りや内部を飾っていたハナや団子が保存会のメンバーの手によって、観客に振舞われ、オカンノンサンの祭礼は終了する。



写真7：飾りを振舞う

5. 陸稲の収穫

オカンノンサンの祭礼が終わり、お盆を過ぎた8月下旬頃、4月に種を蒔いた陸稲の刈り取りが行われる。種を蒔いてから約5ヶ月で90cm程度の大きさに育った陸稲は、天気の良い日に根元から刈り取られ、天日で乾燥させられる。あまり乾燥させすぎると、藁の色が褪せてしまうため、葉先に日除けをして2、3日程度乾燥させた後、紙に包んで12月まで冷暗所で保管することとなる。



写真8：陸稲を刈り取る

6. 秋の鵜無ヶ淵 - オヒマチ -

ソバやサツマイモの収穫を直前に控えた10月中旬、鵜無ヶ淵では、オヒマチが行われる。オヒマチは、氏神である鵜無ヶ淵神明宮^{vi}の祭であるが、オカンノンサンの祭礼に比べると比較的静かに行われる。

日中、氏子たちがムラの中心に位置する神明宮の周りに集まり、酒、果物、昆布、米、魚、野菜を供える。神事は、富士市浅間本町の三日市浅間神社（富知六所浅間神社）の神主によって執り行われる。

神主は、鵜無ヶ淵が属する吉永地区の各集落の神社を回って、午後三時頃にすぐ南の集落である間門から到着する。祝詞、お払いを行った後、神主はすぐに鵜無ヶ淵の北に位置する桑崎へと

出発する。

このオヒマチのお払いが行われた後、夕刻から神明宮の参道で神楽が奉納される。しかしながら、オカンノンサンの祭礼の神楽と違って、オヒマチでは、神明宮に祀られた神に対する神楽であり、神の前で剣を抜くのは恐れ多いと言う理由から、「剣の舞」は省かれ、「下がり葉の舞」、「幣の舞」、「狂いの舞」の3種類の舞しか演じられない。

また、オヒマチの日は各家庭で赤飯を炊いて神棚に供えていたが、かつてはモチを神棚に供えていたという。

7. 冬の鵜無ヶ淵 正月とドンドンヤキ -

年も押し迫った12月下旬、正月に向けての注連縄作りが始まる。乾燥・保管しておいた稲藁もちいて、玄関に飾るもの（注連飾り）と神棚に飾るものの二種類が作られる。神棚に飾るものは「ゴボウ」（牛蒡注連）と呼ばれるもので、



写真 9：お払いをうける氏子



写真 10：神楽を見る住民



写真 11：注連飾りとゴボウ

しによっていきながら、右回しに重ねていき、一定の間隔で紙垂れと呼ばれる紙片をたらししていく。また、玄関に飾る注連飾りは、「牛蒡」と「俵」、「垂れ」とよばれる三種類の稲藁の束を組み合わせたものに、花や紅白の紙垂れ、扇子や鯛といった縁起の良いかざり^{vii}を飾り付けていく。



写真 12：ゴボウを作る

注連縄を作って、いよいよ正月を迎える準備が整う。ただし、鵜無ヶ淵と桑崎では、「モチをつくると火事になる」といって、正月用のモチはつかないという風習（餅無し正月）が残っている^{viii}。現在では、家の中で機械で餅をつくことができるようになったため、このような風習にこだわらないで餅をつく家庭もあるというが、多くの家庭では今でも正月用の餅をつくことは無いという。

こうした風習の由来ははっきりとしていないが、鵜無ヶ淵の人々からの聞き取りをまとめた『吉永の郷土史』によれば、その由来として「昔、不作が続いて大飢饉^{だいききん}に襲われ、そして、村人が飢え死にするような事態になった。そのときこの村の領主旗本戸田氏の中里村の陣屋から役人が調査にやってきた。村人は調査の役人に貧困の実情を訴えるために正月用の餅をつかなかった。」と記述されている。こうした言い伝えが出来上がったあと、言い伝えを破ってもちをついた家庭があった年には、神明宮が火事で焼け落ちたことがきっかけで、餅無し正月の風習は厳しく守られるようになったという。

また、昭和 25 年の 3 月 11 日の晩には、桑崎の全 52 戸のうち 30 戸が全焼するという大火事があった。その原因として「年末に餅をついた家があったからだ」といううわさが広まったこともあったという。

林業を主たる生業とし、わずかな平地で農作物を作っていた地域であるからこそ、贅沢を控えるためにこうした餅なし正月の風習が生まれてきたことも一つの要因であるといえるが、かつてはこの地域は井戸も少なく水に乏しい地域であり、火事に対して特別な警戒心を抱いていたことも餅無し正月の風習が生まれた要因であると考えられる。

では、鵜無ヶ淵の人々は餅の無い正月をどのように過ごすのであろうか。ある家庭からの聞き取りから年末年始の食事を紹介したい。

・ 12 月 31 日（大晦日）

年越しそばを食べる。12 月 31 日は新年を迎える準備にいろいろと忙しいため、

かつてはそばを 30 日に打つことが多かった。

夜に白米を一升炊いて元旦に備える。

・ 1 月 1 日 (元旦)

鶏肉、サトイモ、大根を乱切りにした雑煮^{そうじ}を神棚に供える。この雑煮は三日間神棚からおろされず、毎日注ぎ足されていく。そして三日の昼におろされ、汁を加えて煮て食べたという。また、三が日は必ず男性が神棚に供え物をあげなければならない。

元旦の食事は雑煮、白米と芋、シイタケ、ごぼうを煮たものやキンピラが中心であった。現在では、合わせておせち料理も食べるが、かつておせち料理は、正月に挨拶にくる客をもてなす料理であり、家族はほとんど口をつけなかったという。

・ 1 月 6 日

この日の夜に神棚にござを敷き、七草粥を供える。粥に入る七草は、特に決められておらず、ダイコンやニンジン、ほうれん草、白菜をはじめ、7 種類の野菜が入っていれば良い。

・ 1 月 11 日

鵜無ヶ淵ではこの日に新年はじめて餅をつく。ただし、申^{さる}の日に餅をつく「サルモチ」といって縁起が悪いといわれ、11 日が申の日であった場合は、後日に餅つきを行う。

・ 1 月 14 日 (どんどん焼)

前日もしくは前々日から団子を作り始める。ミズキ(団子の木)とよばれる木の枝先に丸めた団子をつけ、家内の様々なところに供える。神棚は 12 個、床の間は 7 個、窓口は 3 個というように供える場所によって飾り付ける団子の数は異なるが、神棚以外は奇数でなければならないという。この飾りは三日間飾られる。

また、どんどん焼で焼く団子も作られる。

・ 1 月 15 日 (二番正月)

この日の朝食は餅入りの小豆粥を神棚に供え、食する。現在ではガスや電気の調理器が普及しているため、食べ物の煮炊きにかまどを使用する家庭は無いが、かつ

では前日(14日)に行われたどんどん焼のオンベコンベの燃えカスを取って来て、かまどの焚き付けにしたという。

・2月1日(次郎の朔日)

ドンドンヤキのときに作った団子を食べる。

8. ドンドンヤキ

小正月の火祭行事であるドンドンヤキは、全国的に見られる年中行事であり、それぞれの場所における生活環境や行事の位置付けによって、ドンドンヤキの行事のもつ意味は異なってくる。

鶺無ヶ淵におけるドンドンヤキでは、道祖神の祭としての意味を持つほか、正月に迎えた神様を送り出すための火祭であるとともに、家内安全、無病息災、子孫繁栄といった願いをかけた祭でもある。その中でも特に、子孫繁栄の願いが強く、陰陽を模した飾り物を火の中で燃やすほか、オンベコンベと呼ばれる竹棒が倒れた方向の家庭では縁に恵まれるといった占いもみることができる。

以下では、時間を追って、鶺無ヶ淵のドンドンヤキがどのように行われるのかについて見ていきたい。

・1月9日

当番組の人々によって、旧吉永第二小学校跡地の鶺無ヶ淵公園内にドンドンヤキで燃やされる小屋が作られる。鶺無ヶ淵神明宮の敷地内にある木を伐採したものが小屋の柱や骨組みとして使われる。3メートル四方の角に、伐採した木の中で太いものを打ち込み、横木を上下に二本ずつ渡して小屋の骨組みとする。骨組みの中には、伐採したときに出た枝や町内にある廃材を詰めていく。



写真 13 : ドンドンヤキの小屋作り

一方、小屋の中心にはオンベとコンベと呼ばれる竹をたてるため、当番組の中の数人で猿棚の滝近くの竹林へ竹を伐採に行く。オンベコンベの竹として好まれるのは、曲がっておらず、枝葉がしっかりとついているものとされている。

伐採後、オンベ竹は 7 節、コンベ竹は 5 節を残して枝を払い、竹の先端に扇子（末広）を飾る。この扇子は、昨年結婚した家庭から貰ってきたものである。そして、枝にはダルマを結び付け、オンベコンベが完成する。完成したオンベコンベは小屋の中心に立てるが、オンベ竹が小屋に向かって左側にならなくてはならない。



写真 14：オンベコンベを立てる



写真 15：陰陽の飾り物を供える

オンベコンベが立つと、

常緑樹の枝で小屋の骨組みが見えないように覆っていくとともに、町内から集められた正月飾りやしめ縄で小屋の周りを飾っていく。こうして、ドンドンヤキの小屋が出来上がる。

小屋作りが終わると、陰陽を模した飾り物を道祖神の前に供えてこの日の作業は終了する。

・ 1 月 14 日

この日の夕方からどんどん焼の祭りが始まる。当番組は夕方六時前に道祖神の前に集合し、おみ^み神酒をあげる。その後、鶴無ヶ淵神明宮から灯明を貰ってくるグループと陽根をかたどった飾り物を持って新婚家庭を訪問するグループの二つに分かれる。陽根を持って新婚家庭を訪問したグループは、玄関先で花嫁の尻に陽根を数



写真 16：新婚の花嫁の尻をつつく

回押し付ける。こうすることによって子宝に恵まれ、子孫繁栄につながるといわれている。

新婚家庭を訪問した後、ドンドンヤキの会場である鶴無ヶ淵公園に行き、陰陽の飾り物を小屋に設置する。そして、神明宮から貰ってきた灯明で小屋に火をつけ、どんどん焼の開始となる。小屋は勢い良く燃え始め、5分もするとオ



写真 17：燃える小屋

ンベコンベの竹に燃え移るとともに、竹は倒れてしまうが、倒れた方角には縁がくるといわれている。

ただ、この段階では、鵜無ヶ淵公園に集まっている観客はまばらである。時間が経って火の勢いが収まってくると、アカメの木(ミズキ)に団子を指した人々が町内から徐々に集まり、オキになった小屋の周りで、観客は思い思いに団子を焼くほか、その年の書初めを燃やし、ドンドンヤキを楽しむ。

現在のように、調理にガスや電気が用いられるようになる前は、このドンドンヤキの燃えカスを15日の朝に小豆粥を作るためのかまどの焚き付けに使うために持ち帰ったというが、現在では、団子を焼いて一段落すると、ドンドンヤキは終了となる。



写真 18：団子を焼く

こうしてドンドンヤキによって正月に家庭に迎えた神を送り出すとともに、今年一年の安全を願って、また春へ向けてのサイクルが始まっていくのである。

7. むすびにかえて

鵜無ヶ淵の一年の流れを概観してみると、風習や民俗芸能をはじめとして、有形、無形のさまざまな民俗事例が、すこしずつ形を変えながらも現在まで受け継がれていることがあきらかとなった。その理由の一つとして、鵜無ヶ淵の人びとがこれまで営んできた、富士山の山麓という地理条件、自然条件に適応した暮らしが、こうした民俗事例と密接に結びついているということが指摘できるのではないだろうか。しかしながら、日本各地の例に漏れず、社会状況の変化とともに、鵜無ヶ淵に住む人々の暮らしは大きく移り変わってきた。民俗事例と暮らしとの結びつきが希薄になってきた結果、これまで受け継がれてきたもののさらなる継承が困難になりつつあるということもまた事実である。

だが、鵜無ヶ淵をはじめとして、富士山のふもとに広がるこの地域に住んできた人々は、富士山からのさまざまな恵みによって、暮らしを営んできた。この地域に住む私達だからこそ、こうした暮らしと密接に結びついた民俗事例を保存・継承していくことが重要であるといえる。

今回の報告は、鵜無ヶ淵の一年を概観したものであり、それぞれの民俗事例の詳細な分析・記述を充分に行うことができなかった。今後も継続的な調査研究を行うことにより、

鵜無ヶ淵の民俗事例を保存・継承していくことに少しでも役立つことができればと考えている。

参考文献

富士市吉永第一地区まちづくり推進会議 吉永の郷土誌編集委員会 1992 『吉永の郷土史』

吉永公民館 1958 『吉永村の沿革史』

穆清尋常高等小学校 1912 『吉永村史稿』

富士郡役所編輯 1884 『皇国地誌』

静岡県教育委員会 1996 『静岡県の民俗芸能 - 静岡県民俗芸能緊急調査報告書』

富士市教育委員会 1988 『富士市のまつり』

のら企画 2004 『安倍・藁科の神楽 - 清沢神楽・梅ヶ島新田神楽・有東木神楽調査報告書』

吉永郷土史研究会 1998 『道祖神 吉永地区の「セヤーのカミサン」』

-
- i 平成 16 年は 4 月 23 日に種を蒔き、一週間後に発芽した。
- ii 『日本民俗大辞典』によれば、祭礼とは、信仰に基づく神事に観客が加わって、見るものと見られる者が分離し、饗宴・喧騒・風流などの華やかさが増大した祭のことをさす。鵜無ヶ淵のオカンノンサンでの神事では、観客はまばらであるが、神事後に奉納される神楽は、集落内外から多くの観客が集まり、にぎやかに行われるため、本稿では、鵜無ヶ淵のオカンノンサンを祭礼と表記することにする。
- iii 観音信仰は、現世・来世利益のほとけである観世音菩薩、観音に対する信仰であり、日本には飛鳥時代に中国から『法華経』の伝来とともに移入されたと言われている。伝来当初は貴族を中心とした信仰であったが、平安時代から鎌倉時代にかけて生きるために必要な願いをかなえてくれるほとけとして、民衆にも広く広がった。
- iv 青年団には高校を卒業して加入し、結婚するまで所属していた。
- v 神事において、神を招くために手にもつものをいう。また、神事に起源をもつとされるさまざまな芸能において、主役を務めたり、指揮の役の者が手に携えるものを採り物と呼ぶ。鵜無ヶ淵の神楽での主役は獅子であり、本稿でしめす採り物とは獅子が神楽を舞う際に携えているものとする。
- vi 神明宮には、天照大御神が主祭神として祀られている。また、天照大御神にあわせて、相殿には、八幡神、天満天神、愛鷹神、浅間神、第六天神、石神、山神が祀られている。
- vii 注連飾りのかざりをつけていく順番は決まっており、平成 16 年 12 月 10 日に富士市立吉永北公民館で行われた注連飾り作成教室では、花 紅白の紙垂れ 俵飾り 扇子 旗 鯛 小判 的 巾着 蕪という順番で飾り付けられた。特に、小判、的、巾着は、「お金を的に射て巾着に入れる」という願いがこもった順番であるという。
- viii 「正月用の餅をついてはいけない」という風習にあわせて、鵜無ヶ淵には、「鵜無ヶ淵には昔から雷が落ちたことが無い」、「部落内での出産児に産湯を使ってはいけない」、「赤子

に首だけのよだれかけをかけてはならない」、「部落内からは、らい病患者が出ない」、「白色の家畜を飼ってはいけない」、「白色の蔵を建ててはいけない」という内容の、鵜無ヶ淵七不思議と呼ばれる言い伝えが残っている。